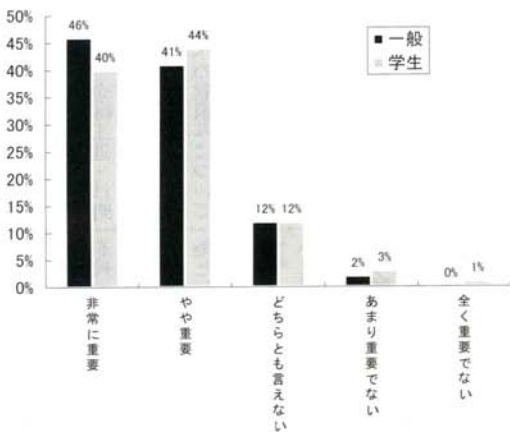


印刷産業の
イメージ調査

身近で社会的に重要

学生の就職人気は24業界中16位



社会における印刷の「重要度」

(社)日本印刷産業連合会(山口政廣会長/日印産連)は2007年印刷文化典事業の一環として、一般生活者と学生を対象に「印刷産業のイメージ調査」を実施し、九月に開催された印刷文化典記念式典会場で結果概要を報告した。調査によると、身近で社会的に重要と認識する人が多かった一方、先進性や学生の就職先人気度は低かった。

調査は世間一般の「印刷業界」に対するイメージを合理的な手法で集計し、分析することで、日印産連の基幹事業である「印刷産業の周知PR」に活かすことを目的に実施された。業界に対するポジティブ、ネガティブの評価を客観的に把握、一般への効果的なアプローチを見出す狙い。

対象は一般生活者と就職活動中の学生の計六百名。インターネットを使用した定量調査から導き出した。その結果、印刷業への「興味度」は「非常に興味がある」、「やや興味がある」が一般で三四%、学生で三

三%だった。また「あまり興味がない」、全く興味がない」は一般が三八%、学生が三九%だった。

一方、「身近さ」については「非常に身近」、「やや身近」が一般で六〇%、学生で五五%と半数を超えた。「重要度」についても「非常に重要」、「やや重要」が一般で八七%、学生で八八%に達した。興味の対象としては低いものの、身近なメディアとして重要とする認識が高い結果となった。

「先進性」については「非常に先進的」、「やや先進的」が一般で三五%、学生で二九%となり、デジタル化が進展し、情報産業の一角を担う印刷産業の実態との格差が現れた。また「将来性」について低い結果、「技術力」は高いと認識する人が多かった。

学生のアンケートで「就職先として興味ある業界」(第一〜第三位)は「情報処理・ソフトウェア」が二六%、「マスコミ・広告代理店」が二二%、「通信」が二一%と情報産業といわれる産業の人气が高い。しかし、情報産業といわれる「印刷産業」は八%と、設問で挙げた二十四業界中、十六番目だった。